研究ノート

廣池春子研究

『思ひ出』の執筆者に関する一考察

白石成子

目次

一、はじめに
二、廣池春子研究の目的
三、検証の方法
四、『思ひ出』の執筆者
五、『思ひ出』執筆当時の様子
六、原稿執筆者
七、おわりに

キーワード：直筆原稿、筆跡、比較、ライフヒストリー

一、はじめに

『思ひ出』は、廣池春子氏（以下、春子とする）が著わした、夫・廣池千九郎氏（以下、千九郎とする）との生涯を綴った自叙伝である。春子が遺した著作はこの一篇のみであり、春子研究においては最重要文献として位置づけることができるだろう。

本稿では、『思ひ出』の内容を検討する前段階として、同書がどのような経緯で執筆、出版されることになったのか、実際に本文を執筆したのは春子であったのか否かについて検証する。春子以外の人物が執筆した場合、たとえ春子の監修を経たとしても書き手の意図が反映される恐れがある。今後の研究において春子の意図を可能な限り正しく汲み取るためにも、内容検討に入る前に執筆者を明らかにしておくことが重要であると考えた。

二、廣池春子研究の目的

（一）女性研究・家族研究としての取り組み

廣池春子は、明治三年（一八七〇）、現在の大分県中津市に、奥平十万石の藩士、角半衛と妻エイの長女として生まれた。上士の身分で二〇〇石取りだった角家であるが、明治新政権下の秩禄処分によって俸禄による収入がなくなってからは、中津の城下町から宇野村という農村に移り住んで、養蚕や田畑の開墾等を始めている。しかしながら、開墾や耕作に人を雇うなど、いわゆる「士族の商法」で、慣れない仕事に両親は

非常に苦労したようである。そんな両親の姿を見ながら育った春子は、弟二人が東京の叔父を頼って上京すると、手に職をつけて両親を助けたいとの思いを強め、裁縫を習い、弟子をとるまでになった。こうしたエピソードから、孝心の厚い行動力のある女性だったことがうかがえる。

明治二十二年（一八八九）に満十八歳で農家である廣池家に嫁いでからは、主婦が家庭内の実権を握っていることに戸惑い、姑と大姑の板ばさみとなって苦労している。また、千九郎が門人らに語った話として、夫の前では決して足を崩すことなく、何時間でも正座のまま話し相手となったことなども伝えられている。長幼の序、夫婦の別を重んじる武家の家風の中で厳格に育てられたのだろう。当時の武士階級出身女性の多くがそうであるように、春子もまた、夫のため、家族のため、もしくは家のために生きることを当然のこととして受け止めていたようである。

しかしながら、春子のような生き方は、当時の中・下流階層の女性にとって一般的な生き方だったのだろうか。武家出身の春子は、農家である廣池家の家風に大きな戸惑いを感じていたと語っており、属する階層によって家風も生活習慣も大きく異なっていたことは、想像に難くない。

また、春子が生きた明治初期から昭和初期の時代は、家族関係も大きく変化した時代であった。現代日本における一般的な家族形態である核家族からなる近代家族[1]が成立したのはこの時代である。近代家族の成立期において、故郷を離れて核家族での生活を始めた廣池家の生活は、女性研究、家族史研究においても重要なモデルケースになり得るだろう。

（二）廣池千九郎をより深く理解するために

モラロジーの創設者である千九郎については、病との闘いや、その途上で得られた宗教的転回および、人心救済に尽力した学者としての側面からは、これまでも多くの研究が重ねられてきた。しかしながら、その千九郎を陰ながら支え続けた妻の姿や、最も身近な人間関係である「家族」の中での千九郎の姿については、これまでほとんど語られることはなかった。

千九郎の長男である千英氏が、「（父と）一緒に食事をするということはほとんどありませんでした」「私の家庭は父のいない家庭でした」と述べているように[2]、研究に没頭した千九郎は家庭的な父親とは言えないかもしれない。しかし、彼の人生が家庭とは全く無関係に展開されたとは考えがたい。千九郎の人生をより多面的に、総合的に把握するためにも、彼の家庭生活とその家族について研究を深める必要がある。

以上のような問題意識から、春子研究に取り組むつもりである。上述の通り、本稿ではその第一段階として、『思ひ出』の執筆者について検討する。

三、検証の方法

（一）執筆原稿の検討

筆者の専門は考古学であり、「モノ」の分析を通じてそれらの「モノ」が属する社会、集団、文化などについて考察している。そのため、本稿は文献に対する考察ではあるが、文献を「モノ」として捉え、考古学の型式学的手法を援用して分析を行いたい。分析の基本は「分類」→「比較」→「再構成」の繰り返しであ

る。

（二）執筆状況の検討

『思ひ出』執筆当時の状況が記録されている文献資料の検討を行う。本稿で主に用いる文献は、『廣池春子夫人』（廣池学園出版部編）と『父 廣池千九郎』（廣池富著、廣池学園出版部）の二冊である。

以上、原稿と執筆当時の状況を総合的に検討することで、執筆者を明らかにしていきたい。

四、『思ひ出』の執筆者

（一）執筆原稿の型式学的検討

『思ひ出』の執筆原稿は、現在、廣池千九郎記念館に所蔵されている。この中には、印刷にまわすために清書された印刷用の原稿と、その前段階の執筆原稿とが含まれる。本稿の目的は、執筆者を明らかにすることにあるので、執筆原稿のみを分析対象とする。

この執筆原稿を概観すると、用紙、筆記具、筆跡にそれぞれ違いが観られる。用紙と筆記具は道具であり、いわばハードウェアに属するものである。それに対して筆跡は、筆をとった人物の癖や感情が表れるソフトウェアに属するものであるので、この二者は大別できる。ハードである用紙と筆記具は、それぞれの素材および様式によってさらに分類が可能であるが、以下に本稿で用いる各分類要素について詳述する（第2図参照）。

①用紙

執筆原稿の中には、二種類の用紙が混在している。一方は20×20マスの棚つき原稿用紙が用いられており、もう一方はマス目のない罫線のみの罫紙が用いられている。そこで、マス目入り原稿用紙を1類、罫紙を2類としておく。なお、この罫紙は、陸軍の「電報起案表」が転用されており、廣池学園内での使用者は限定されるであろうが、本稿ではそれを明らかにすることはできなかった。そのため、使用者から執筆関係者に辿りつくことはできなかった。

②筆記具

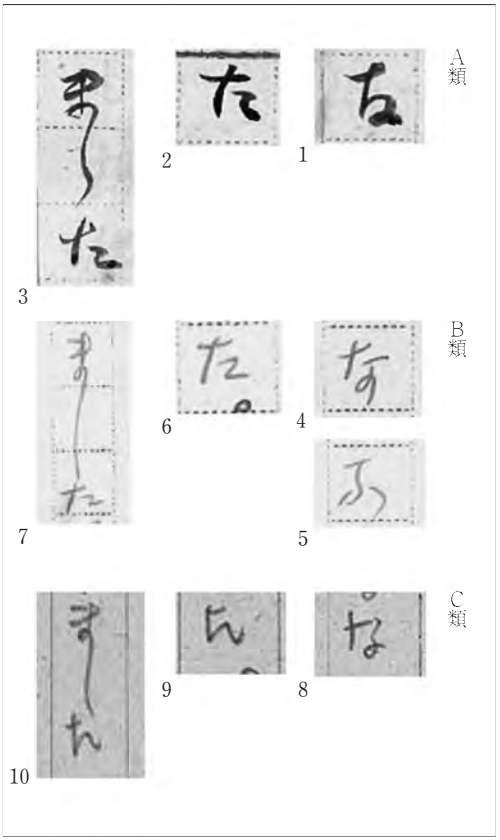
筆記具には、毛筆、鉛筆、万年筆があり、それぞれ「毛筆」をア類、「鉛筆」をイ類、「万年筆」をウ類とする。

③筆跡（第1図）

筆跡は、概ね前述した用紙や筆記具の分類項目ごとに筆跡の違いが観察できた。分類の前提として、同じ用紙に同じ筆記具で書かれた連続する一文は、一人の人物が書いたものと判断した。

ここではひらがなの書き癖を分類基準とし、崩し方やはね方に特徴のみられる「な」および「た」の違いと、「ました」と続けた時の筆運びに注意してA～Cの3類に分類した（第1図）。

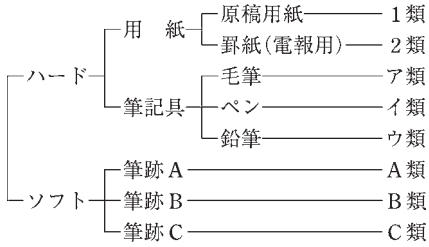
A類（1～3）の「な」（1）の字は、必ず一筆連続で書かれており、B類およびC類の一画ずつ離して書かれたものとは異なる癖がある。また、「ました」（3）と三文字続けて書いた時に、A類では「し」の字のハネをしっかり表現しているのに対して、B・C類（7・10）ではほとんどハネを意識していないなどの違いが見られる。



第１図　筆跡分類

B類（4～7）の「な」の字は、明治三十三年（一九〇〇）の小学校令施行規則の第一号表に示された、現在一般的に用いられる「な」（4）の字を用いる他に、変体仮名（5）も併せて用いている。

C類（8～10）の最も大きな特徴は「た」の字の「こ」の部分が、必ず「ん」の字のようにハネる（9）点にある。A類・B類ともに、「た」の字の「こ」部分はとめている（2・6）ので、明らかな違いが認められる。



第2図　執筆原稿の分類項目

筆跡＼筆記具	ア	イ	ウ
A	○	×	×
B	×	○	×
C	×	▲	○

○：多
▲：稀
×：無

第3図　執筆原稿における筆記具と筆跡との相関関係

用紙＼筆記具	ア	イ	ウ
1	○	○	▲
2	×	×	○

○：多
▲：稀
×：無

第4図　執筆原稿における筆記具と用紙との相関関係

次に、分類を試みた前述の各項目が、実際の執筆原稿の中でどのように組み合わさっているのかについて検討する。まず、筆記者が限定されやすい筆跡と、筆記者によって好みが出やすい筆記具との組合せについて確認する。筆跡A類は必ずア類の毛筆と、筆跡B類は必ずイ類のペンと組み合わさることが確認できた。筆跡C類については、主にウ類の鉛筆が用いられるが、稀にイ類のペンが用いられることが確認できた（第3図）。

続いて、用紙と筆記具との組合せでは、1類の原稿用紙にはアの毛筆で書かれるものと、イのペンで書かれるものが確認できた。一部ウの鉛筆による書込みが見られるが、これは稀にしか見られない（第4図）。

以上の結果から、原稿執筆には、異なる筆跡と異なる筆記具を用いる三人の人物が関与したことが推察できる。この三人の人物を、筆跡分類と照らして、仮にAさん（毛筆と原稿用紙を使用）、Bさん（ペンと原稿用紙を使用）、Cさん（鉛筆と罫紙を使用、稀にペンを用いる）とする。

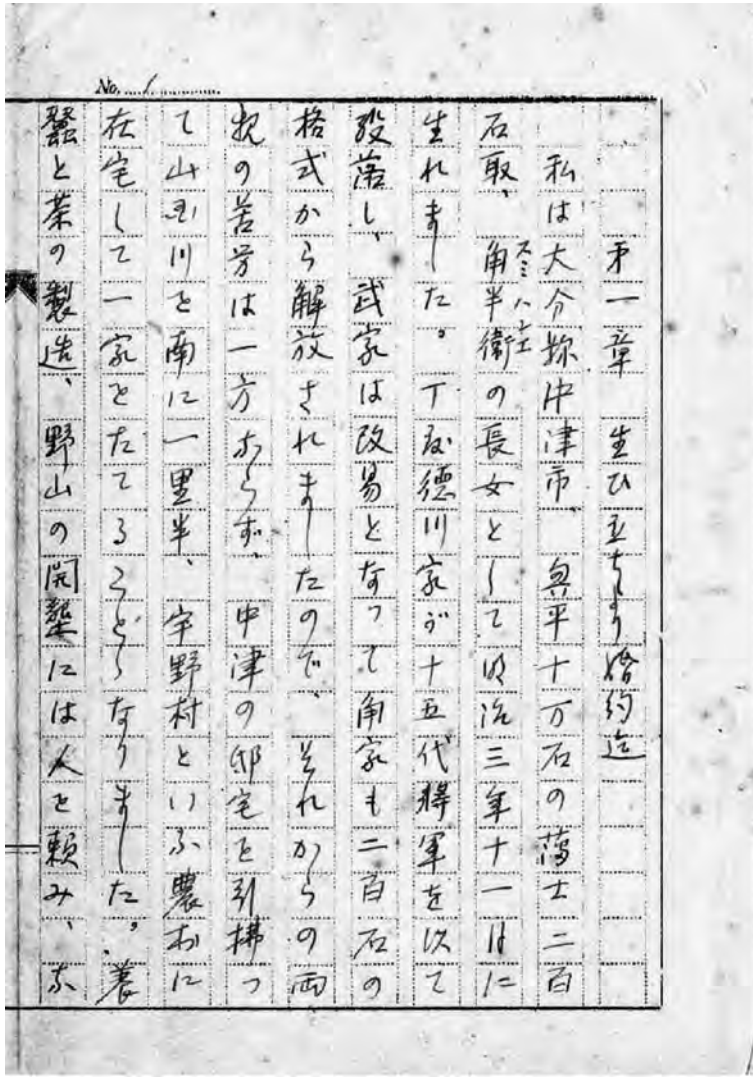
（二）原稿の執筆順

前項では、原稿の諸要素を分類して、有意な相関関係を持つ三名分の要素を抽出することができた。そこで本項では、抽出した三名分の要素について、総合的に執筆原稿を検討し、三名の関わり方を検討していきたい。

まず、それぞれの執筆者による原稿の分量であるが、全体で原稿用紙に換算して約四十四枚分あるうち、Aさんの原稿は、原稿用紙一枚分にも満たない。同じく、Cさんの原稿は罫紙三枚分で、原稿用紙に換算すると二枚分程度であろう。残りの約四十枚はBさんが書いたものである。Bさんの原稿がベースとなって、そこにAさん、Cさんの原稿が挿入されている。

原稿の大半を占めるBさんの原稿は、誤字、脱字がほとんどなく、Bさんの筆跡による推敲は全く見られない（第5図）。こうした状況から、Bさんの原稿は清書されたものであると考えられる。それに対して、Aさんの原稿はAさん自身による推敲とともに、Cさんによって、筆記具を変えて二度の推敲が加えられている（第6図）。

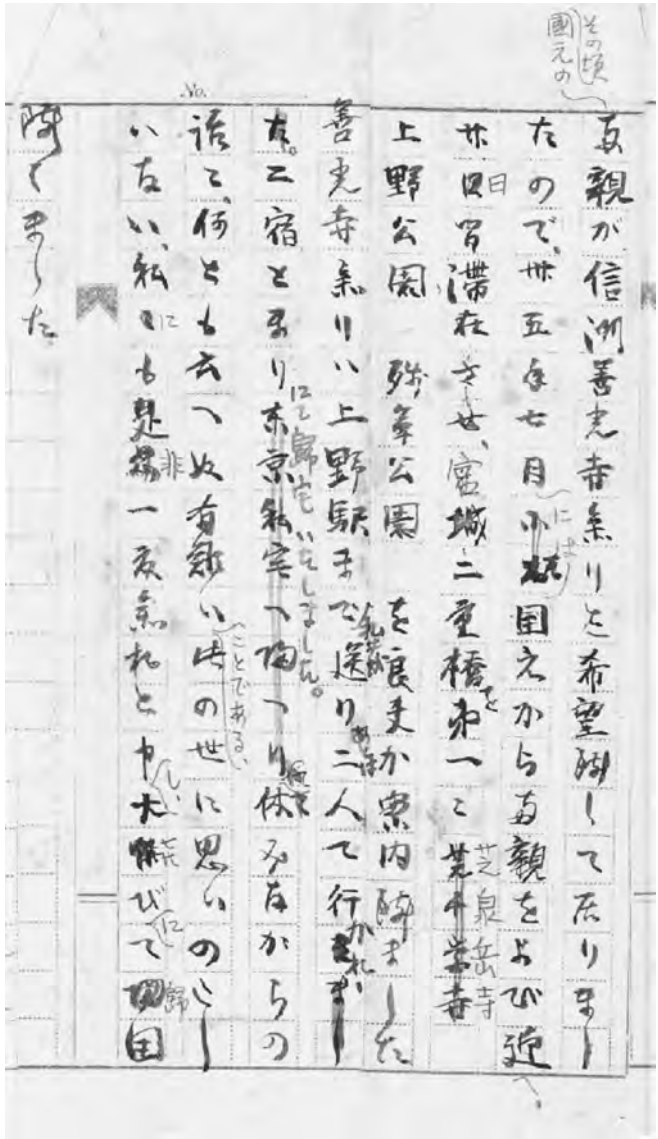
このAさんの原稿は、Bさんの原稿に挿入箇所が指示されたうえで、該当箇所に貼り付けられている。また、切り貼りされた原稿は、文頭が用紙の最初の行からは始っておらず、その前後に他の文章が続いていた



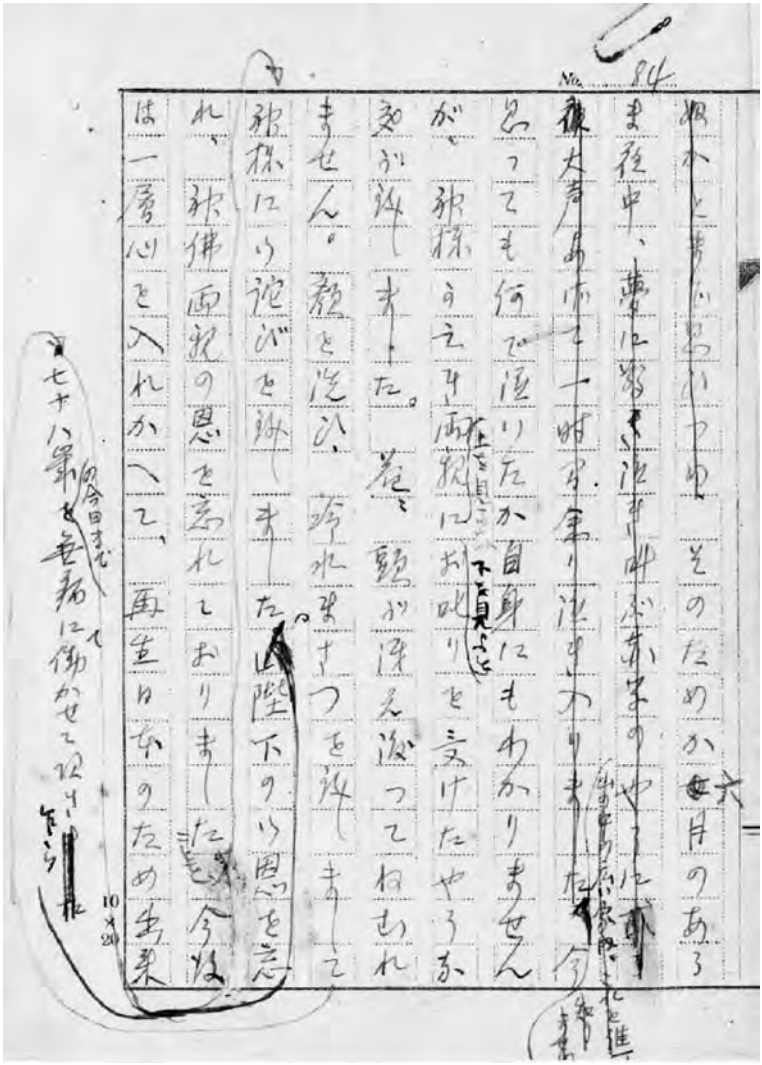
第一章　生ひ立ちと婚約迄

私は大分県中津市、魚平十万石の藩士二百石取、角半衛門（スミハエ）の長女として明治三年十一月に生れました。丁度徳川家が十五代将軍を以て政権を返し、武家は改易となって角家も二百石の格式から解放されましたので、それからの両親の苦労は一方ならず、中津の邸宅を引払って山国川を南に一里半、宇野村といふ農村に在宅して一家をたてるようなりました。養蚕と茶の製造、野山の開墾には人を頼み、ふ

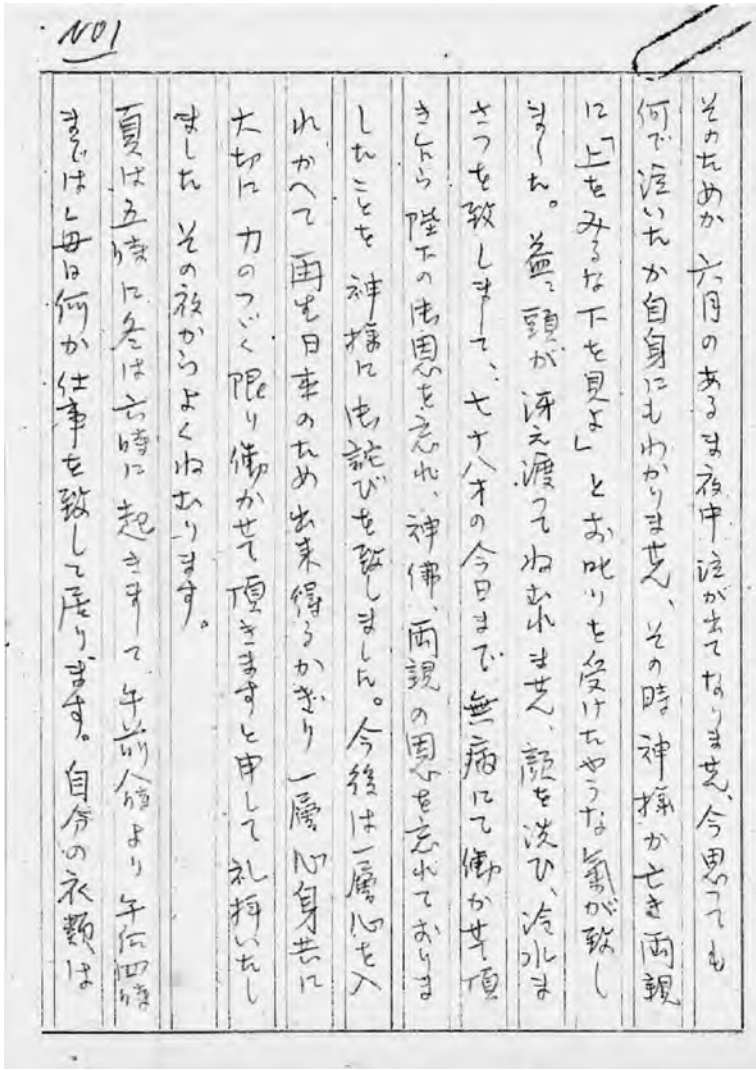
第5図　Bさん原稿の冒頭部分



第６図　Ａさん原稿の一部



第７図　Ｂさん原稿の最終章



No1

そのためか六月のある夜中泣が出てなりません、今思っても
何で泣いたか自身にもわかりません、その時神様が亡き両親
に「上をみるな下を見よ」とお叱りを受けたやうな氣が致し
ました。益々頭が冴え渡ってねむれません、顔を洗ひ、冷水ま
さつを致しまして、七十八才の今日まで無病にて働かせ頂
きましたのは陛下の御恩を忘れ、神佛、両親の恩を忘れておりま
したことを神様に御詫びを致しました。今後は一層心を入
れかへて再生日本のため出来得るかぎり一層心身共に
大切に力のつづく限り働かせて頂きますと申して礼拝いたし
ました　その後からよくねむります。
夏は五時に冬は六時に起きまして午前八時より午後四時
までは毎日何か仕事を致して居ります。自分の衣類は

第８図　Ｃさんの罫紙原稿

可能性が考えられる。このことは、Bさんの原稿とは別に、Aさんの原稿が元々存在していたことを示していると考えられる。

また、Cさんの罫紙に書かれた原稿は、最終章を清書したものである。Bさんの原稿では、第七章で一応の完結を迎えて「をはり」、とAさんの毛筆で書き込まれているが、その後、終章である第八章がBさんの筆跡で書き足されている。この最終章に限っては、Aさんの毛筆による推敲の痕が見られる。Cさんの罫紙原稿は、この推敲が著しい箇所と内容的に重複しており、この部分を清書した様子がうかがえるのである（第7・8図）。

以上の観察結果からいえることは、Cさんは、A・B両者の原稿に手を加えていることから、最終的な校正を任された人物であったということである。また、AさんはCさんと共に、最終的な校正段階に意見を述べた可能性が高いと考えられる。それに対して、原稿の大半を清書したBさんは、最終的な校正には加わっていない。原案の執筆者が校正に加わらないということは考えがたいので、Bさんは清書のみを任された人物だと考えて差支えないだろう。

五、『思ひ出』執筆当時の様子

本項では、文献資料から『思ひ出』執筆当時の状況について考察する。

春子に関する記録はあまり多いとはいえないが、モラロジー創建五十年記念特集号として、『れいろう』第十八巻五・六号に春子の特集記事が収録されている。これは、「モラロジーの学祖広池千九郎の奥様、春

子夫人のご苦労を偲び、感謝と報恩の念を新たにする」という目的で、春子と関わりのあった人々が、それぞれの思い出を綴ったものである。これらの文章は、のちに『廣池春子夫人』という一冊の本にまとめられ、春子の人柄や当時の状況を知ることのできる資料となっている。そのなかで、数名が『思ひ出』執筆当時の様子について書いている。

篠原直吉氏によると、ある日春子は「自分も年をとったので、何か今までの思い出を書いてみよう」、「第一章はどこまで、第二章はどこまでというように、二晩考えたところ、頭の中にもう本が出来た」[3]と語ったという。また、炭崎守一氏は、春子が「博士のことを自分が書かなければ、誰も書く人がいない」、「みんなは、博士は偉い偉いといわれるが、それよりも、もっとご苦労された内容を話してほしい」[4]と語り、自らを叱咤して筆をとっていたと述べている。

これらの出来事は、『思ひ出』が出版される前年の昭和二十二年（一九四七）初秋の頃だったようである。昭和二十二年といえば、千九郎の十回忌にあたる年であり、十周年の記念追悼式が行われている。春子はこの記念行事を終えて、自身の中で人生の区切りを迎え、千九郎と過ごした日々を回顧したのかもしれない。没後十年を記念しての回想記を、周囲に依頼されて書いたのではないことが、出版時期と門人らの記述から推察できる。

春子は、誰に依頼されたわけでもなく、千九郎の苦労の内容を皆に知ってもらいたいという思いで、自発的に書き始めたようである。千九郎の苦労と努力を伝えられるのは自分しかいない、との使命感があったのかもしれない。執筆を決意してから一、二ヵ月の後に、周囲の人々に対して「ようやく原稿ができた」と、とてもうれしそうな笑顔を見せながら語ったという[5]から、執筆は春子にとって楽しい作業だったのではなか

ろうか。

こうしてまとめられた原稿は、長男であり、当時の研究所所長であった廣池千英氏が出版に向けて池田貫也氏に校正を依頼し、春子とともに原稿の見直しが行われた。[6] 前項で検討した原稿Cの加筆部分は、池田氏によるものであろう。小山政男氏も、池田氏は校正の手伝いをしたとの表現を用いているので、[7] 春子が執筆した内容に若干の修正が加えられたものの、大幅な改変は行われていないと考えられる。おそらく春子の意思を尊重しながらの校正作業だったのだろう。

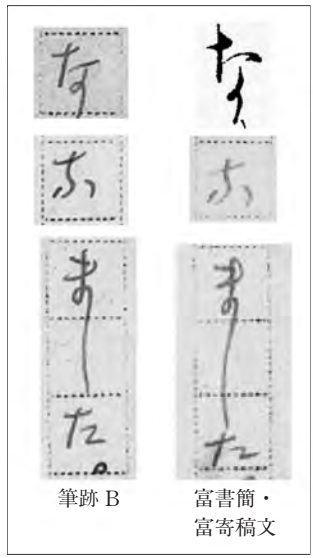
以上の門人らの回想から、原稿の執筆は春子自身が行っていたことは、ほぼ確実と言ってよいだろう。また、最終的な校正も、春子を交えて池田氏が行ったことは間違いない。これらの記録から、最も推敲箇所の多いAさんの原稿（筆跡A）が春子のものであり、全ての原稿に校正を加えている筆跡Cが池田氏のものである可能性が極めて高いことが立証できた。

六、原稿執筆者

筆跡Aの人物は春子であった可能性が高いことは前項にて指摘した。そこで、春子の筆であることが明らかな書簡の筆跡と、筆跡Aを比較したところ、双方の「な」の字及び「ました」の「し」の字が酷似していることがわかった（第9図）。両者は同一人物とみて間違いないと考えられる。筆跡による比較からも、Aさんは春子であることが追認できた。

では、清書したBさんは誰であろうか。『思ひ出』の初版には、子どもたちの序文や寄稿文が添えられて

第 9 図　筆跡 A と春子の書簡筆跡との比較



第10図　筆跡 B と富の書簡・寄稿文筆跡との比較

いる。長男千英氏は序文を書き、長女とよ子氏は「母を偲びて」、次女の富氏（以下、富とする）は「母を讃える」という一文を寄せている。廣池千九郎記念館に所蔵されているこれらの寄稿原稿を比較すると、富の寄稿文の筆跡は、筆跡Bに酷似しているのである（第10図）。また、使用している原稿用紙も、Bさんの原稿用紙と同じものである。これらの事実は、次女の富が春子の原稿を清書したことを示していると考えられる。

富は千九郎の原稿の清書を手伝ったり、後に『父　廣池千九郎』という回想録を執筆したりしていることから、著作活動に関する心得があったものと思われる。また、富は春子にとっては非常に身近な人物であり、個人的に清書を依頼する相手としては最も自然な相手である。春子をとりまく状況からも、筆跡の比較からも、Bさんは富であると考えられる。

七、おわりに

結論としては、Aさんは春子、Bさんは富、Cさんは池田氏であると考えて間違いないだろう。原案をまとめたのは春子であることが門人らの回想から明らかであるが、実際に遺されている春子直筆の原稿は、原稿用紙一枚にも満たない。しかしながら、富がどの程度まで原稿執筆に関わったのかについては検証できなかった。清書する時点で、春子の原稿に対して意見を述べたり、エピソードの取捨選択が加えられた可能性も否定できない。なぜなら、富による清書原稿に、春子による推敲前の原稿が切り貼りされているからである。一度は除外されたエピソードが後に採用された可能性があるからだ。

しかし、『思ひ出』序文で長男の千英氏は、「母の文には多少判り難い所があるとは存じましたが、かへつて原文そのままの方が母の真意をお伝へ出来るかと存じまして、そのまま版にいたしました」と読者に断っている。また、富をはじめ門人らは、千九郎の原稿を清書する際に、原文に忠実に写すことを徹底されていた。そのことを考えると、春子の原稿に富が手を加えた可能性は低いと考えられる。今後、文体や内容の吟味を通じて、富の影響について検証する必要はあるが、『思ひ出』は春子が内容構成から原案執筆まで手がけたことは間違いないと考えられる。富の影響を考慮にいれながら、次稿では内容の検討に入りたい。

引用文献

廣池春子　一九五八『思ひ出』道徳科学研究所
廣池千英　一九七〇『広池千英選集　第二巻』広池学園事業部

広池学園出版部編　一九八一『廣池春子夫人』広池学園出版部
廣池富　一九八六『父　廣池千九郎』広池学園出版部

注

（1）落合恵美子『近代家族とフェミニズム』（勁草書房一九八九年）によると、「近代家族」はつぎのように特徴づけられるという。
⑴家内領域と公共領域の分離
⑵家族成員相互の強い情緒的関係
⑶子供中心主義
⑷男は公共領域・女は家内領域という性別分業
⑸家族の集団性の強化
⑹社交の衰退
⑺非親族の排除
⑻核家族
近代において家族は、社会に対して閉じられた集団に変質したと論じられている。

（2）廣池千英一九七〇「父の人間像　家庭の父」『広池千英選集　第二巻』広池学園事業部、p. 332

（3）篠原直吉一九八一「モラロジー第一の功労者」『廣池春子夫人』、p. 105

（4）炭崎守市一九八一「女性が幸せになる五か条」同、pp. 36–37

（5）塚谷哲郎一九八一「はかり知れない内助の功」同、p. 122

（6）塚谷哲郎、同書、p. 122.「やがて千英先生のご指示があって池田貫也先生が原稿の校正をはじめられ、それが年明けて一月に『思ひ出』と題して出版になりました。」

（7）小山政男一九八一「心の温かい方でした」同、p. 188.「（春子が）ぽつぽつと『思ひ出』の原稿を書き始められるようになられ、それを池田貫也先生がお手伝いされて、ついに一冊の本となって出来上がりました。」